

特集

学びの場とコミュニケーション

学校の外側に、さまざまな学びの場がつけられ始めている。
ここで、誰と、どんな「コミュニケーション」ができるのだろうか？
科学、演劇、美術、三つのフィールドから探ってみた。

Science Drama Art

科学

演劇

美術

博物館における 「学び」とは？

岩崎 誠司 国立科学博物館専門職員

博物館は来館者にとってどんな存在であるべきなのだろうか。
博物館の行う教育活動のあり方とは？

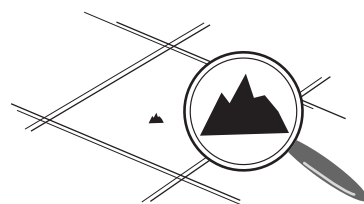
国立科学博物館の学芸員である岩崎誠司さんが、
来館者とのふれあいや自らの体験を通して、
博物館における理想的な「学び」の姿を提唱する。

博物館は、資料の収集・整理・保存、調査・研究、展示、教育活動を行う施設です。近年、博物館の教育活動が注目され、その充実が図られるようになっていきますが、博物館の本質はあくまでも資料の収集・整理・保存と調査・研究にあります。これらの基礎的な活動の充実があつて初めて、科学的な裏づけに基づいた博物館独自の展示や教育活動を展開することが可能になるのです。

博物館でのいろいろな「学び」

そうした点を踏まえた上で、私自身が博物館で学び、博物館における「学び」について考えていることを紹介させていただきます。

博物館には、来館された方々のさまざまな「学び」があります。国立科学博物館に勤務するようになってから、私は数多



特集/学びの場とコミュニケーション
Science [科学]

くの来館者と出会い、それぞれの「学び」に接するようになりました。最初に、そうした経験の中から、私が直接かかわった「学び」の事例を紹介します。

①博物館の小さな教室で「顕微鏡の観察」という企画を行ったとき、70歳くらいの方が「顕微鏡を見たい」と来館されました。小学校で顕微鏡をのぞいたときのことを60年以上経った今も忘れられず、ぜひもう一度見てみたいとのことでした。

②「春の植物」という教室では、孫の付き添いで来館された方が、春の小さな植物を実体顕微鏡で観察し、「身近な小さな

花がこんなに美しいなんて」と感激。「当たり前だと思っていた風景をもう一度見直してみたい」と言って帰られました。

③突然、事務室にいらした方が、「地球が丸いこと、自分が引力の働きで地面に立っていることはわかる。だけど、地球の反対側の人が落ちないことがわからない。これと質問されました。「なんとかしなくては」と頭をひねって回答したところ、その方は納得して満面の笑みで帰っていかれました（そのときの私の回答は文末で紹介します）。

④娘さんの付き添いで来館し、娘さんと

いつしよに自然教室などに参加していたお母さんは、次第に自分が熱心に受講するようにになりました。中でも海生哺乳類に関心を持つようになり、ホエール・ウォッチングなどにも出かけ、やがて博物館の標本室の助手を経て、海生哺乳類の解剖や研究を行うようになりました。現在、その方は国内外の研究者と交流し、世界的に活躍するようになっています。

⑤20年以上前に実施した、研究者が直接指導する「青少年科学活動」という教室に参加していた少年は、研究者といっしょに継続的な探究活動を行った経験が強く印象に残り、その後、自然史分野の研究・教育の道を志しました。私は、彼が学芸員の資格を取得するための博物館実習生、博物館のボランティア、台東区の科学活動の指導者として活動する場面にかかわりました。そして、博物館での経験が長い期間にわたって影響を及ぼすことを確認しました。彼は大学院博士課程を経て、東京都の生物の教員になることが決まっています。

学校と違い、博物館における来館者と職員の間には「一期一会」のことが多い。博物館でどのような「学び」が起きているのか、その後にはどのような影響があるのかを知りえる機会は多くありません。こうした例は、「博物館に勤めていてよかった」と思わせてくれる貴重な出会いの数々です。

博物館の「学び」の特徴

以上の例から、博物館の「学び」の特徴を考えてみます。学校での「学び」と比較すると、より具体的にイメージできると思います。

①専門家が「資料」に基づいた「学び」を提供する。

②対象として設定する年齢は、発達段階によらず、幅がある。異年齢を対象に行うことも多い。

③学習に対する強制力はなく、学習者の主体性による個々の興味・関心に応じた学習を行う。評定は行わない。

④いつからでも、どの分野からでも学び始めることができる。専門家によって奥行きも保障されている。

⑤講演会・観察会は完結型が多く、継続型は少ない。

学校や団体が利用する場合は、数百人を対象としたレクチャーを行うこともありますが、最近の傾向として、個々の関心に応じた「調べ学習」への対応を希望する例が増えています。子どものうちから博物館を自分の「学び」の場としてとらえ、「好きだから学ぶ」という人が増えるように「調べ学習」の希望に対し、可能な限り対応するようにしています。ぜひ博物館を一生付き合える「学び」の場にしてほしいと思います。





おじいちゃんはサルから生まれた？

学校以外にも学ぶ場や機会は増えつつあります。その中でも、博物館の重要性が増していると考えられる事例がありました。

博物館には、小学生から大人まで、多数の質問が電話や手紙、訪問などによって寄せられます。「総合的な学習の時間」に関連して、「『絶滅』について教えてほしい」という質問はとくに多いものです。そんな場合は、絶滅の恐れのある動植物の現状や対策などについて小中学生に説明するわけですが、説明しているときの子ども

たちの反応に違和感を覚えることがたびたびありました。あるとき、ふと思いついて、こんな質問をしてみました。

私「あなたは誰から生まれましたか？」

児童「お父さんとお母さん」

私「お父さんとお母さんは誰から生まれましたか？」

児童「おじいちゃんとおばあちゃん」

私「では、おじいちゃんとおばあちゃんはどうして？」

児童「ひいおじいちゃんひいおばあちゃん」

私「そのひいおじいちゃんひいおばあちゃんはどうして？」

児童「サル」

私「じゃ、そのサルは誰から生まれたの？」

児童「恐竜」

私「恐竜は？」

児童「微生物（アメーバ）」

義務教育の中では「進化」を扱わなくなっているのに、私も小中学生が「進化」の詳しい道筋を知らないのは当然だと考えています。時間とともに「種」が分化するというイメージは難しいものですが、曾祖父・曾祖母がサルから、サルが恐竜から「突然」生まれたと考えているとしたら、考え込んでしまいます。

さらに小中学生に尋ねてみると、「生命」は歴史的に何度もいろいろな場所で誕生したと考えることもわかってきました。それは、今後も「生命」が突然誕生すると考えていることを意味します。「生命の連続性を理解せずに、現代の「絶滅」についてだけ学んでも、本当に理解したとはいえないのではないだろうか。しかも、小中学生にしたのと同じ質問を大學生に出してみたところ、一部の学生からは小中学生と同様の回答が返ってきたのです。

私は以前は学校で学ぶ内容と関連づけた展示を行うことで、「学び」の相乗効果をねらうことを考えていました。現在は国立科学博物館として「科学」をきちんと紹介するような内容の展示を行うべきだと考えるようになりました。

カエルの卵を知らない子ども

国立科学博物館では、1985年に参加体験型展示「たんけん館」を開館しました。私はこの「たんけん館」を皮切りに、「たんけんフロア」「たんけん広場」と13年以上にわたって、展示施設の設計・運営にかかわってきました。とくに「たんけん広場」の設計は、私にとって大きな「学び」の機会になりました。

「たんけん広場」の設計は白紙の状態から始まり、その内容は担当者に一任されたため、私はそれまでの自分の研究経験や来館者との出会いを振り返り、ヒントを得ようと思いました。とくに印象的だったのは、ある親子のことでした。

博物館の教室を使った1週間の企画として、さまざまな動植物の春の状態を集めて展示したことがありました。その中に、父親が子どもの頃に馴染んだヒキガエルの卵があつたので、自分の子どもにも「触ってごらん」と声をかけたのですが、子どもはカエルの卵を見るのも触るのも初めての経験だったのです。父親は、自分の子どもがヒキガエルの卵を知らなかったこと、そのことを自分が今まで気づかなかつたこと、そして、子どもの育っている環境が自分の子どもの頃とはあまりにも違っていることにがく然としました。そうしたことに気がついた父親は、「次の休みには必ず子どもを自然の中に連れて行く」と言うて帰りました。



私にとっては、博物館の中に集めた小さな自然が、親子が世代の違いを知る場となったこと、野外のフィールドとつながるきっかけになったことが大きな収穫でした。

この出会いが一つのきっかけになり、たけん広場「発見の森」を設計しました。「発見の森」は、主に関東地方の雑木林をモデルにした実物大のジオラマです。来館者はその中を歩いて、自分で動植物や化石などを発見しながら「自然の見方」を学びます。展示物には説明パネルや解説を極力つけず、来館者に自分で動植物や岩石・化石を探してもらおうようにしました。さらに詳しいことを知りたい場合には、標本や資料を収めた「森の標本箱」や図書資料を使い、自分で調べられるようにしました。

ここでは、知識を持って帰ってもらおうことよりも、自分が知りたいと思ったことをどのようにしたら調べられるかという「学び方」を体験してもらおうことを大切に考えています。そのために説明パネルや解説を減らし、代わりに教育ボランティアという「人」を配置しました。来館者の興味・関心を引き出すような働きかけを心がけ、教えずに自分で調べることで、来館者と博物館が交流する機会をつくりだしています。

「学び」の機会をくれた「発見の森」

「発見の森」を設計し、全体の構成や動物の種の選定などを行った経験は、私に

とつて大きな「学び」の機会になりました。年間100万人が訪れる博物館で、10年間展示を行えば、1000万人の目に触れることになるため、大変な責任を感じました。ジオラマを設計するには、個々の種の生態について熟知する必要がありますでしたが、扱う範囲があまりにも広すぎました。わからないことは文献にも当たりましたが、資料に「詳しい生態はわかっていない」と記述されていることもたびたびでした。つてをたどってその分野の第一人者にインタビューし、文献として記述されていない経験則をもとに展示にした内容もあります。

参加体験型展示では、来館者の働きかけによって情報が現れるものも多く、利用者がどのような展示の使い方をするか、その場合に正しく情報が伝わるかどうかを吟味する必要があります。そこで、これまでの自分自身の来館者の方たちとかかわりや生物に関する知識などを総動員して取り組んだのですが、それによって自分の現在の力量を知るよい機会にもなりました。

博物館らしい「学び」の姿とは？

「発見の森」以前には、展示室を設計する際、教育担当の職員が中心的な役割を果たすことはありませんでした。この経験であらためて身に染みたのは、博物館は研究機関であり、資料の蓄積とそれに

基づく研究の継続がないと、展示を作ることはできないということでした。つまり、学芸員自身が学び、その学んだ成果を来館者に提供しているというわけです。

学芸員はそれぞれ研究テーマを持ち、資料を収集・調査し、知識や技能を修得して研究した成果を、展示や学会発表・講演会などを通じて社会に還元しています。学芸員の仕事の進め方と、研究テーマに取り組む学芸員自身の「学び」が、博物館の「学び」のモデルになりえることを実感したので。このことは博物館らしい「学び」を模索していた私にとって、大変参考になりました。それ以来、学習支援活動を計画・運営する際には、博物館の学芸員をモデルとした「学び」の形を取り入れるように工夫しています(下記コラム「国立科学博物館の学習支援活動」を参照)。

いわさき せいじ

1968年東京生まれ。千葉大学園芸学部卒業。放送大学大学院修了。物心つく前より国立科学博物館に通う。90年より仲間と東京都町田市でタヌキの生態調査を行い、「町タヌキ」と命名。人とタヌキの共生法を提案し、同研究・発表にて、土木学会「地球環境都市/パネル展」最優秀作品・建設大臣賞受賞。アニメ映画『平成狸合戦ぽんぽこ』のモチーフとなる。92年より国立科学博物館に勤務し、プログラムの企画開発、実施、展示の設計・運営などの教育活動全般に携わる。

来館者といつしよに「学び合える」場を

博物館で「学ぶ」人は、これからも増えていくことでしょう。そうした個々の「学び」に対応できる、「学び」を支援する人の養成が望まれています。

関連して、国立科学博物館では、平成17年度より大学生の科学リテラシーやサイエンス・コミュニケーション能力の向上を目的に、大学と連携した「国立科学博物館大学パートナーシップ」を開始しました。この事業には、ますます高度で細分化していく科学技術と一般社会をつなぐ役割を担う「サイエンス・コミュニケーター」の養成が盛り込まれています。平成18年度からは、「サイエンス・コミュニケーター」養成のための講座も開講します。

これからは、博物館で体験的に「学ぶ」人が増えていきます。私の目標は、博物館で「学ぶ」人と「学びを学ぶ」人がいつしよになつて「学び合う」場を、博物館の中に用意することです。

最後に、「地球の反対側の人が落ちないことがわからない」と質問しに来た来館者に伝えた私の回答をご紹介します。

「まず順番に絵を描いてみましょう。①丸い地球の上に人(自分)が立っています。②反対側にも人が立っています。反対側の人には落ちてしまいうすですね。③自分の隣に人を書き加えます。隣の人が落ちないことは納得してもらえますね。④その

隣、その隣と人をどんどん書き加えていきましよう」

このようにして、反対側に立っている人の隣まで人を書き加えていくことで、質

国立科学博物館の学習支援活動

■総合的な学習の時間

「総合的な学習の時間」では、児童・生徒の興味・関心に応じたテーマで、さまざまな教育施設を活用し、資料活用能力、コミュニケーション能力、情報収集能力、発表能力の育成を目指しています。この諸活動と、学芸員の仕事である「研究テーマを持ち、資料を収集・調査研究し、情報交換を行い、展示や学会発表・講演会などを通じて社会に還元していくこと」には共通点があります。「総合的な学習の時間」の目的や学習の進め方を「学芸員」の仕事と比較することで、児童・生徒に、①テーマを深める、②テーマに関連した内容を調べ、学習を深める、③学習をまとめ、展示や解説の表現法の工夫をするなど、各段階の活動を具体的に意識できるようにしました。

■たんけんクラブ

国立科学博物館「たんけんクラブ」では、小学5年生から中学3年生までの児童・生徒が毎年異なるテーマに、半年から1年間継続して取り組んでいます。平成13年度のテーマは「エネルギー」でした。テーマはこちらから出しましたが、活動時間の使い方は参加者に任せ、試行錯誤させることにしました。とくに印象的だったのは、テーマに関連した内容を調べ、学習を深めるという活動で、インターネットを長い時間使ってみた結果、「インターネットは調べたいことが決まっているときは情報を探すのに便利だけど、調べたいことを探すには役に立たない」と言ってくれたことでした。さらに「たぐさんの情報の中から自分の興味があることを探すときは、図鑑や博物館のほうがかすとい」と話してくれました。これは自分で体験してみないと会得できない大切なことです。いわゆる「無駄な時間」が本当は大切なのだと考えています。

問した方に、誰も落ちないことを納得してもらえました。全員で手をつなぎ、隣の人、確かに立っていることを確認してもよいですね。

平成14年度は「人」のからだをテーマに設定。博物館の展示から「展示テーマの設定方法」「調べた内容の発表方法」を学び、参加者が展示を制作して発表する活動を行いました。発表形式を「展示」としたことで、調べ学習のための各活動の位置づけが明確になり、参加者たちは「学芸員として、異年齢で協力して展示を作成しました」。

「たんけんクラブ」の卒業生にはサポーターとして参加してもらっています。その子たちがサポーターとして年下の参加者を指導してみても、「参加者のときには分からなかった先生の苦労がわかった」と言ってくれたときには、苦労が報われたと実感しました。

■教育ボランティア

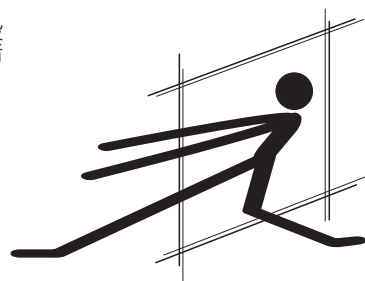
国立科学博物館では、約3000人の教育ボランティアの方々の登録があり、展示室をはじめとするさまざまな場所で実際に活動していただいています。中でも、特筆すべきは「森の標本箱」の制作とプログラムの企画・実施です。

「森の標本箱」は「発見の森」開設に先立ち、教育ボランティアの方々と職員とで教材開発を始めたもので、さまざまな標本や教材、資料が収められています。現在では教育ボランティアが自主的に資料の収集・整理、標本箱の制作、プログラムの開発、相互研修を発売に行っています。来館者のプログラム提供を目標にしているため、具体的なプログラムの開発が求められ、教育ボランティア自身の学習意欲も高まっていると考えられます。ここでも自分の「学び」と来館者の「学び」が両立しています。このほかにも、国立科学博物館では学芸員の資格取得を目指す博物館実習生が、年間2400人在籍しています。彼らは展示室に立ち、来館者に対応する中で、博物館における「学び」について学んでいます。

Drama [演劇]



「踊り」を通して 生きる力を育む



齋藤 和美

わらび座「夢ワーク」事務局・ワークショップチーフ・役者

全国で一大ブームとなっている踊り「ソーラン節」。
そのルーツは秋田県に本拠地を置く
劇団わらび座だということは意外に知られていない。
同劇団では、今も多くの子どもたちが「ソーラン節」のワークショップを体験する。
自分を表現することで生まれる「コミュニケーションの可能性を
インストラクターの齋藤和美さんが語る。

人生を変えたわらび座との出会い

わらび座との出会いは高校3年生の夏。小学生の頃の私は活発な子どもでもでした。しかし、なぜか中学生の頃から、それまでと同じようには友だちの輪に入っていくことができなくなり、そのうち人に対して壁をつくり、しゃべらなくなりました。そんな私でしたが、唯一発散でき、自分らしくなれたのが、ソフトテニスをしているときでした。しかし、そのテニスも県大会で敗退。「インターハイに行くことができれば、自分の何かが変わるのではないか」という希望は消え、私は自分を表現する方法をすっかりなくしてしまいました。その頃、障害を持っていた従妹が太鼓や踊りを習うわらび座の合宿に参加することになりました。たまたま暇だった私が、従妹の付き添いで行くことになり、わらび座で太鼓をたたくことになったのです。太鼓はとても正直な楽器です。自分の気持ちを込めないと音は響きません。私はまったく乗り気ではなく、ただなんとなくたたいていました。だから、最初はいい音なんてまったく出ません。でも、周りの大人が一生懸命汗を流す姿や、従妹にとってはかなり大きい太鼓を精いっぱい

たいている姿にしだいに胸が熱くなり、自然と自分のバチにも力が入るようになっていきました。

そのとき初めて、自分の太鼓がいい音となつて響き、周りの人の音と一つになることができたのです。その太鼓の音は私の心にも響き、言葉では言い表せないほど、大きな感動が広がりました。インストラクターの方が「それでいいんだよ」と、満面の笑みで言ってくれたことも忘れられません。そのひと言は、自信をなくしていた私にとって大きな励ましとなりました。

わらび座との出会いは、新しい自分を発見することができたステキな旅となりました。家に帰ってからそのときの感動が忘れられず、「自分の可能性にチャレンジしてみたい。精いっぱい生きたい」と強く思うようになったのです。秋田のわらび座行きを決意したのは、それから間もなくのことでした。

一生懸命はカッコイイ！

現在はわらび座の「夢ワーク」というチームで、たざわこ芸術村のわらび座を訪れる年間80校近い学校の修学旅行生たちに「ソーラン節」などを教えたり、一般のお客様を対象にさまざまなワークショップを開催しています。

稽古場で子どもたちにもいつも伝えていることがあります。「一生懸命はカッコイイ。稽古場は精いっぱい自分を出すところ



ろ。たくさん間違っているところ。そして大切なのは、間違った後に次の一步をどう踏み出すかということ」。

教えるときに心がけていることは、「教えるほうも心から楽しむこと」「自分も子どもたちの『仲間』として共に創り合いたい、喜び合うこと」「子ども以上に汗をかき、恥をかくこと」「自分を120%以上出す」「子どもたちができた瞬間を逃さず、喜び合い、みんなで認め合う」「すぐにOKを出さず、『もっとできるよ』と伝え続け、可能性を引き出してあげる。気づかせる」ということなどです。

踊りを教えている私の中に、本当の答えはありません。子どもたち自身が、踊りを通して自分と向き合い、仲間と向き合つて精いっぱい流した汗、感じたこと、感動が本当の答えだと思っています。

稽古場は生きる力を育む場所

稽古場では人間のいろいろな面に出会います。中でも、最近とくに多いのが「失敗はだめ、格好悪い」と思い、自分の失敗を隠すために人の失敗を笑う子どもたちの姿です。

彼らは私の言うことをよく聞き、言われた通りに踊る元気な高校生たちでした。一見とてもいい踊りでしたが、私は悩んでいました。「この子たちの踊りには何かが足りない。それは何だろう?」と。そして、ワークシヨップの中盤に差し加かつ

たところで、それが分かる事件が発生しました。

突然、クラスみんながある青年を指さして笑い始めたのです。その青年は不器用な子で、たびたび失敗してリズムから外れて踊っていました。しかし、彼はまっすぐ前を見て一生懸命踊っていたので、私は「ステキな子だな」と思っていました。そんな彼をクラスみんなが笑っていたのです。

私は胸がたまらなく苦しくなり、怒りを爆発させました。

「なぜ笑うの!? 一生懸命やっついて、失敗して何がおかしいっ!」

稽古場は水を打ったようにシーンとなりました。

「そんな気持ちで稽古場にいられては困るっ! 稽古場は本気になるところ。人間、本気になれば、失敗もする。この稽古場の床には、たくさんの方々の汗と涙が染み込んでいる。たくさん失敗して、泣きながらも恥かいてでも立ち上がれるのは、共に励まし合つてがんばれる仲間がいるからなんだ!」

「みんなが今踊っているソーラン節は、命がけでニシン漁をするときに、お互いを励まし合い、仲間同士の心を一つにするために歌われた作業歌だよ。みんなの呼吸が合わなければ、船から落ちてしまう。北の冷たい海だから一瞬のうちに凍りつき、即死だ。だからね、ソーラン節は仲間と命を守るための歌なんだ。今のみ



たざわこ芸術村わらび劇場



同・化石館



んなのままだと、この踊りは踊れない。本気でやるか。やめようか。決めるのはみんなだよ。私じゃない！」

沈黙がしばらく続きました。やがて、「私やるよ！」本気でやったらダイエットにもなるかな」という声が次々と上がりました。

それからの彼らは漁師そのものでした。声を出すのも、ただ出すのではなく、お互いを励まし合う生きた声になりました。そして、練習の後のクラスごとの発表会では、観る人の心を震わすような見事なソーラン節を踊りきりました。人の心を震わすと同時に、自分の心も震えた様子で、踊りきった彼らの顔は自信と喜びに満ちあふれていました。

しばらくしてから、彼らから手紙が届きました。驚いたのは、どの子の手紙にも「本気で怒ってくれてありがとう。本気で怒ってもらったのは初めて。うれしかったよ」と書いてあったことです。

「そうか、そうだったのか…」

私は喜びと同時に切なくなりました。彼らの周りには、本気で彼らと向き合う大人がいないのか…。

ここ数年、子どもだけではなく、先生の様子も変わってきています。中でも私がとくに感じるのは、「一番大事な瞬間に怒る先生が少なくなっている」ということです。ほめることはたくさんするが、怒ることとはしない。

今の子どもたちは言葉づかいも荒く、

汚い。平気で人が傷つく言葉を吐く。でも、私は思う。きっとそれは自分を守るためのもの。心の叫び、大人へのメッセージ、挑戦なのだ」と。

そんな子どもたちと、私たち大人はどれだけ本気で向き合うことができるのだろうか？正直向き合うことが怖くて、逃げ出したいときもあります。それでもやっぱり私は信じて向き合いたい。どんな子どもでも、本気でまっすぐな目でソーラン節を踊ることができる力、すなわち生きる力を持っているから。

コミュニケーションで大切なこと

今年の2月にアメリカへ公演に行きました。役者として、日本の歌や踊りをステージで演じるためです。言葉が通じないアメリカで日本の歌や踊りはどれだけ伝わるのか、内心不安もありました。しかし、最後にはスタンディングオベーションで、舞台と客席が見事に一つになったのです。言葉の壁を越えて通じ合えることに胸がいっぱいになりました。

日本の歌や踊りは、働く中から生まれてきたものがほとんどです。豊作を願ったもの、仲間と力を合わせるためのもの、困難を乗り越えるためのもの…。命を守りつなく歌や踊りだからこそ通じ合うことができたのでしょう。そして何より、私たち役者一人ひとりに「伝えたい」という強い気持ちがあったからだと思います。



たざわこ芸術村森林工芸館



さいとう かずみ

茨城県ひたちなか市出身。1990年高校卒業後、1年間、劇団わらび座養成所の研究生を経て、翌年に入座。これまでの主な出演作品は、ゆめみちやⅡ『金太と虹色の魚』の金太役、歌舞『21・飛翔』（歌・踊り・太鼓の舞台）など。歌舞の舞台では韓国・アメリカツアーにも参加した。現在の仕事は、アートコーディネイト企画「夢ワーク」事務局・ワークショップチーフ・役者。「夢ワーク」では、踊り・太鼓・演劇などのワークショップの指導のほか、地域貢献プログラムとして作曲・振り付けの創作、市民ミュージカルの脚本・演出・指導など、さまざまなプログラムを手がけている。

人間に感動できる出会いの場を

子どもたちといっしょに踊る中で、たくさんさんのドラマが生まれます。その中でも忘れられないのが、こんな出来事です。ある高校の女子生徒が発表会の後、泣き出しました。彼女はクラスの先頭に立つような活発な子でした。

「私は絵を描いたり、見たりして感動し

シアトルでは、小学校低学年の子どもたちに向けてワークショップを開きました。日本語を勉強している子どもたちだったので、通訳なしで行うことになりました。しかし、勉強しているとはいえ、小学校低学年。結局ほとんど通じず、ジェスチャーとなりました。それでも子どもたちは夢中になって、きらきらした瞳で踊ってくれました。

コミュニケーションで大切なこと。それは「伝えたい気持ち」「知りたいという気持ち」「ボディートーク」の三つであると、私はアメリカに行つて強く感じました。

アメリカでは、日本以上にボディートークが多いように感じます。握手をしたり、抱き合ったり、手をたたき合ったり……。自分の感情をカラダで表現することで、言葉以上に伝わる時もあります。アメリカでたくさんの人と出会い、別れるときに、ギュッと抱きしめ合うたびに胸が熱くなり、何度も泣きそうになりました。ボディートークは最高のコミュニケーションです。

たことはある。でも人間に感動したのは今日が初めて。クラスのみんな、ありがとう！」

私は、人間が人間に感動できる、生きる力になる、そんな出会いの場をつくりたいと思っています。文化の力は偉大です。無限です。いろいろな方法で自分を表現することはとても素晴らしいことです。これからも「踊りのワークショップ」を通して、子どもたちの心と生きたコミュニケーションをしていきたいと思っています。

「わらび座」と「たざわこ芸術村」

民謡の宝庫と呼ばれる秋田県仙北市にホームベースを置く「わらび座」は、音楽家・原太郎によつて1951年に創立された劇団。伝統芸能をベースに、日本の素材を生かしたオリジナル・ミュージカルの制作・上演のほか、民族舞踊や太鼓のワークショップなど、多彩な活動を展開している。現在、五つの公演グループで年間1000回以上の全国公演のほか、アメリカ・ヨーロッパ・アジア・ブラジルなど多くの国々で海外公演を行っている。

ホームベースのある「たざわこ芸術村」では、芸術とリゾートが結合した本格的な総合文化エリアづくりが進められており、オリジナル作品を上演するわらび劇場を中心に、温泉施設、リゾートホテル、地ビールのフルワリー、森林工芸館などが建ち並び、年間約30万人の観光客が訪れる新しい文化の発信地となっている。

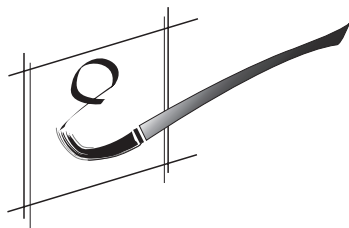
教育と文化の接点で取り組まれてきた「わらび座への修学旅行」は20数年の歴史を持つ。毎年約80校1万人以上の子どもたちが「たざわこ芸術村」とわらび座を訪れ、ソーラン節を踊るワークショップや農作業などを体験している。

ミュージアムは「教育」から「サービス」の時代へ

山本 育夫

特定非営利活動法人つなぐ理事長
武蔵野美術大学非常勤講師

この十数年でミュージアムにおける教育活動の幅は広がったように見える。しかし、その多くは内向きの活動に過ぎなかったと山本育夫さんは言う。ミュージアムのリストラが進み、サービス機関への脱皮が求められている今、本来の意味で市民がミュージアムの主役となる日は来るのであろうか。



学びの場として機能してきたか？

ミュージアムが、学びとコミュニケーションの場として有効な場所なのかどうか。この14年間、『ミュージアム・マガジン・ドーム』という、「日本初の美術館教育ドキュメント雑誌」と自認している雑誌の編集長を務めてきた自身に問うてみる。すると不思議なことに、この国のミュージアムは、学びとコミュニケーションの場としてはまだまだその有効性を発揮していない、という結論が浮かんでしまう。いや、そもそもミュージアムが学びとコミュニケーションにおける有効な場であるのかどうか、あらためて考え込んでしまう自分があるのだ。

確かにこの十数年で、ミュージアムにおける美術館教育とか博物館教育の必要性は認識されてきた。そして、それを専門とする学芸員も育ってきた。ワークショップやギャラリートーク、セルフガイドやオリエンテーリング、出前授業、各種ツアーやクルーズなど、来館者や学校の児童生徒たちに向けた活動の幅は広がった。教育的な展覧会の活動も驚くほど多彩な展開を見せるようになってきた。

しかし、ここに来て、どうやらそうした活動は、いつてみれば活動しているふりをして、という段階を超えているように

は思えない気がしてきたのだ。「ふり」をしているということの意味をもう少し砕いていえば、いずれの活動も来館者を含め、非常にわずかな人たちを相手にしてきたにすぎないこと。また、そうした活動の多くが、やはりまだまだ学芸員のための活動にすぎないということ。教育普及を主の活動ととらえる学芸員の、自己実現や館内外の関係者に対するアピールの手段にすぎなかったのかもしれない、という意味で。そうではなくて、基盤整備的な活動がもっともつとなされるべきではないのか。

サービス機関としてのミュージアム

学びとコミュニケーション、とこう並べてみると、この二つのテーマ、そうは簡単に咀嚼できるテーマではないことがわかる。学校現場でさえ投げ出さざるを得なかったように見えるこの難題を、教育の専門家もいない、いたとしてもその数が少ないミュージアムが引き受けられるものだったのだろうか。

今となつてみれば、いささか荷の重いテーマだったことがわかる。学びもコミュニケーションもミュージアムには手に余るテーマだった。そこに、新たに湧いて出てきたかのように見えるミュージアムへのミッシンが現れたのだ。それをいささか早急に「ミュージアム・サービス」という言葉で表してみるとする。「サービス」という視点



を導入したとたんに、これまでのミュージアム・エデュケーションが、来館者のため、という「ふり」をしていた活動であったことが一目瞭然となってしまう。これはなかなか興味深いミッションである。この15年でこの国のミュージアムは、研究機関としてのミュージアムから、教育機関としてのミュージアムへとその役割を重層させてきたわけだが、そこへ加えてサービス機関としてのミュージアム、というイメージを付け加える時代がきたということになる。

なぜそういう事態に陥ったのかという理由は、すでにご存じのように行政改革の嵐がこの国のミュージアムや大学、各種研究機関を猛烈な勢いで襲っているからである。国立館の独立行政法人化や国立大学の法人化、さらには県や市町村施設における指定管理者制度の導入などがそれである。そして、この改革におけるキーワードが「観客」なのであり「観客サービス」なのだ。具体的には入館者数ということになるのだが、ミュージアム・サービスという視点から考えると、本気で来館者や非来館者に向けてサービスをしていけば、必ず入館者数は伸びる、というごく当然な結論に至る。学びやコミュニケーションもまた、ミュージアム・サービスという観点から考え直す必要がある。

展覧会を変えた教育担当の学芸員

ここであらためて、この国のミュージアム

ムは研究機関としてその役割を果たせたのであろうか？と問うてみると、残念ながらそうはならなかった。この15年間で研究に邁進したい諸氏はとてもこんな場所では研究できないと考えて、機を見て大学へと転身していった。教育機関としてのミュージアムのほうはどうだろうか？こちらはそれなりの成果を収めたように見える。

たとえば、この15年間で、教育普及担当の学芸員、というものの存在が認知され、教育普及という活動のジャンルがあるということが認知され始めてきた。ミュージアムはコレクションを展示して見せたり、企画した展覧会を公開したりするだけの場所ではなく、収蔵しているさまざまなコレクションについて学んだり、調べたり、その知識を生かして活動したりといった、今回のテーマでもある学びやコミュニケーションを体験できる場として、大きな成果を上げてきたように見える。

また、このことは案外知られていないのだが、実は展覧会そのものの認識をかなりの程度柔軟に、時として画期的に変貌させて見せたという実績も残した。研究者が主導する展覧会はオーソドックスで、また新聞社などが用意した展覧会はエンターテインメント性を発揮して見せてくれはしたが、展覧会の構造そのものの変革というところには及ばなかったし、また展覧会の企画業者たちが変革の可能性を追求しようと考えていたわけで



山梨県立博物館

もなかった。

これに対して教育普及担当の学芸員は、その多くが美術史を専攻した学芸員ではなかったため、自在な発想で型破りな展示を試みることができた。たとえば、決まりきった退屈な解説やキャプション、定型の展示作法、紋切り型のカタログにパンフレットやポスター。こういった定型を壊してみせたのは、教育普及担当の学芸員たちだったといっても過言ではない。彼らは確かにこの国のミュージアムや展覧会を画期的な場に変えてみせたのだ。それまででは考えられなかった、西洋名画の隣に子どもの絵を展示する、といったことや、神聖な展示室で子どもたちとわいわいワークショップをしてみせたりするというような「出来事」によつて。こうした活動は日常的には許されないミュージアムなのに、教育普及担当の展覧会ではほとんどのことが許された。

ミュージアムに押し寄せる変革の波

しかしだ。こここにきて猛烈なミュージアムのリストラのもと、教育普及担当の学芸員は自分たちがリストラされるのではないかという恐れを抱き始めている。いやそれは恐れではなく事実として、あちこちでリストラが実行されるようになってきた。ばかりではなく、このところいわゆる研究者としての学芸員をはじめとして、丸ごとミュージアムをリストラする傾

向が加速してきた。そして、マネジメントとかサービスとか県民参画とかといった新しい課題が浮上してきた。「観客」「市民」「住民」といった存在が初めてのこのようなに登場したのだ。

つまりこういうことになる。この国の公立ミュージアムのほとんどは、非常勤の館長をヘッドに置き、2年くらいで入れ替わる行政職の副館長のもとで運営されてきた。つまりミッションがあったとしても、そこにはオリジナル性がなく、どの国立館も同じような使命のもとに、本気でミュージアムのことを考えるトップやサブがいたわけでもなかった。そして、ほとんどの館が本庁の出先機関であり、本庁が予算のさじ加減を握っていたし、現場知らずのこの部署が、ある意味、ミュージアムの存亡を決める力を持っていた。館長は議会で発言する権利も持たない、便利な雇われ人だったのだ。

だから現場を運営しているのは、結果的に学芸員たちだったということになる。学芸員たちは本人がその気にならない限りは異動もなく、トップもサブもミュージアムの仕事に関しては、さほど口出しもできないため、学芸員たちはいつてみればミュージアム天国の中で十分自分たちがやりたいことを謳歌できたのだ。唯一、本庁からの経済的な圧迫のみが、いささか気に染まない出来事ではあったが。

このことは、学芸員たちの自治、という良い展開を生む場合もあったが、ほとんど



やまもと いくお

1948 年山梨県生まれ。東京芸術大学美術学部卒業後、山梨県立美術館で学芸活動と美術館教育に携わった後、ミュージアム・マガジン『DOME (Document of Museum Education)』をはじめ数多くの雑誌の編集に携わる。2003 年に特定非営利活動法人つなぐ (通称つなぐ NPO) を設立。『勝手にミュージアム』『ミュージアムの通信簿』など独自のプロジェクトを展開している。

の場合、学芸課は、それは研究者たちの体質によるところも多かったと思うが、極めて内向きのシステムを構築してしまい、結果的にみれば、学芸員たちはミュージアムをいつのまにか自分たちの持ち物でもあるかのように錯覚するに至った。ミュージアムのコレクションを守る使徒としての学芸員、というミュージアム像は、こうした学芸員を続出させたのだ。だから変革の時代が到来して、ミュージアムは誰のものか？ ミュージアムとは何なのか？ こうした問いそのものが、初めての問いのような顔をして現れることになったのだ。そしてそういう事態の前に、これまでのミュージアムにおける学びやコミュニケーションというテーマを置いてみたとき、それらの活動がいかに基盤整備に欠けた活動であったかが、白日の下にさらされてしまったのだ。

このところ新設されたミュージアムでは、教育普及という言葉は消え、代わりに企画交流という言葉が使われている。教育して普及する、というような、考えてみればいささか高い位置からの物言いのようなスタイルから、企画して交流する場、というフラットな考え方が導入されたのだ。教育からサービスへと書いたのはこのことを指す。今まで放っておかれた「観客」や「住民」たちが、これからのミュージアム像の主人公になる兆しであってほしい。

十年後の公立館はどうなっているか

紙面が尽きた。最後にこれから十年の公立ミュージアムの行く末をスケッチしてみよう。

これからの十年、リストラされ尽くして、多くの公立館は独立行政法人化した。指定管理者制度により新たな担い手として現れた企業や NPO によって運営されるようになるだろう。最小限の機能しか持たなくなるであろう生き残った多くの公立館を、たとえば地域のセンターとして蘇生させ、その運営を担うのは、やはり多くの NPO や住民、観客たちだろう。観客サービスを徹底した館は、サービスという新しいテーマを担い、その本来の意味でのサービスを徹底したとき、利用者にとって必要な施設として生き残り、その本来の意味を蘇生させていることだろう。そしてそのとき、ミュージアムの運営を司るのは、これまで形骸化し果てていたミュージアム協議会であるはずだ。この協議会は市民とミュージアム職員による、柔軟で効率的な運営組織となっていることだろう。

しかし、このように再生を果たせる施設は少ないかもしれない。閉館か他目的の施設への転換もありえるだろう。そうした事態を招かないためにも、現役の、館長をはじめとした学芸員諸氏の本格的な意識改革を望みたい。